

**Fitzpatrick, T., 2011, "Response 2: Social Science as Phronesis? The Potential Contradictions of a Phronetic Social Policy," *Journal of Social Policy*, 40(1): 31-39.**

（T. フィッツパトリック, 2011, 「応答 2：フロネシスとしての社会政策？ フロネティックな社会政策の潜在的な矛盾」）

**序文 (p.31)**

- Spicker (2011)<sup>1</sup>は、全般的に共感するような示唆的な貢献をしている。しかし、著者の主要な懸念として次の2点がある。
  - Spicker 論文は、いくつかの重要な議論に対してみずからを文脈化 (contextualise) することに失敗している。
  - それゆえ、いくつかのきわめて重大な哲学的・方法論的問題の提起を怠っている。
- 本論文の目的は、Spicker 論文全体を批判することではなく、フロネシスのアプローチに関心をもつ人が目を向けるべき重要な論点に注意を向けることである。

**ペレストロイカ (pp.31-33)**

- Spicker は、Flyvbjerg (2001)<sup>2</sup>に依拠して、実証主義と実在論の代替案を検討している。Flyvbjerg の議論は、アメリカの学界に即座に影響を与え、社会科学や政治学の内部で「ペレストロイカ運動 (perestroikan movement)」(=定量的・数学的手法を用いた研究の支配を批判し、それに対抗する手法の鮮明化に向かう運動) が起こるのを促した<sup>3</sup>。
- Spicker もまた「ペレストロイカ運動」を呼びかけている一方で、関連する議論のなかに自身を位置づけることも、そこで何が争点になっているのかを特定することもしていない。Spicker の議論は、Flyvbjerg が設定した「価値中立・普遍的・文脈から切り離された自然科学」／「個別主義的・価値負荷的・実践指向の社会科学」といった二分法を再現しており、そのために、Flyvbjerg に対して向けられてきたような批判に対して脆弱になっている。
  - たとえば、Spicker は社会政策がこれまで実践的な判断に基づいてきたと述べるが、フロネシスが非因果的・非説明的・非普遍的な何かを指すのだとすれば、そうした

<sup>1</sup> P. Spicker, 2011, "Generalisation and Phronesis: Rethinking the Methodology of Social Policy," *Journal of Social Policy*, 40: 1-19.

<sup>2</sup> B. Flyvbjerg, 2001, *Making Social Science Matter*, Cambridge: Cambridge University Press.

<sup>3</sup> ここでのペレストロイカ運動とは、アメリカ政治学会およびその機関誌である *American Political Science Review* の編集方針への批判を契機とした学問的な動向のことを指していると思われる。2000 年に *American Political Science Review* の編集者宛てに送付された「Mr. Perestroika」の署名が付された匿名のメールには、アメリカ政治学会における定量的・数学的手法を用いた研究の支配を批判する内容が記されており、このメールを契機として、「主流派政治学」への対抗勢力となる手法の鮮明化にむけた作業が開始されたとされる。小野耕二, 2011, 「『新しい政治学』への展望——『政治変容』と『政治学の変容』との架橋」『名古屋大学法政論集』(242): 82-86 参照。

実践的な判断がフロネシスであるとは必ずしも限らない。フロネシスを産出したとして Spicker が挙げる論者も、フロネシスとは区別される社会理論に依拠したり、因果関係の同定を指向したりしている。

- したがって Spicker は、自然科学と社会科学の関係を過度に単純化しているという点で、Flyvbjerg に追随している。Flyvbjerg が批判されたように、自然科学と社会科学の多くの面が互いに学び合うよう収斂しているのであるから、このような単純化は、社会学者がみずからをどのように見るべきかについての不要な二分法を押し付けることになる。
- 「ペレストロイカ運動」に与する者たちは、とりわけ実証主義者が発展させてきた因果的説明に満足しないが、そのなかには一方で自然科学と社会科学を別の領域に置こうとする者がおり、他方にはこうした動きにも批判的な者がいる。Spicker の議論は、こうしたすでに存在する議論との関係でどのような位置にあるのかが不明瞭である。

## 2つの解釈 (pp.33-34)

- Spicker は、フロネシスが「基底的なメカニズム (underlying mechanism)」に関するものではなく、したがって普遍的に適用可能なものではないとして、フロネシスを普遍性 (universalism) から区別する。
- Spicker は、フロネシスについての競合する解釈があることを強調しつつ、それらがいずれも行為に関するものであると述べる。しかし Spicker は、フロネシスを抵抗 (resistance) と結びつける解釈と、連帯 (solidarity) と結びつける解釈という性質の異なる重要な解釈の相違を混合している。

## 解釈 1：抵抗としてのフロネシス (pp.34-37)

- Spicker によれば、フロネティックな社会政策は、社会現象を「基底的なメカニズム」の発露とみなすことではなく、事実や観察の根拠にもとづいた (grounded) 分析を含意しており、一般化は特定の状況から形成されるべきとされる。
- この点でも、Spicker は Flyvbjerg の影響を強く受けている。Flyvbjerg によれば、Aristotle のいうフロネシスは、規則に従うこと (rule-following) や普遍的原則 (universal principles) よりも、活動することや実践すること (doing and practising) に関わるものとされる。
- しかし、Flyvbjerg のアプローチには重大な問題がある。たとえば、彼は社会科学を、私たちがみずからの道徳的実践を改善するために用いる文脈依存的な物語の連なりとみなすが、もしすべてが文脈依存的な物語であるならば、そうした文脈から合理主義的・批判的な距離をとることはいかにして可能だろうか。私たちは、ある物語を評価するためにその物語自体を拠りどころとすることはできず、もしも独立した不偏的な立場をとる可能性がないとすれば、物語を規範的に区別するための基盤を欠くことになる。

- この問題に関して、Spicker は、良い一般化を悪い一般化から区別する指針として、①理論的な推論ではなく証拠から始めるべきこと、②一般化された言明を他の例によって相互確認すること、③演繹法を避け、社会的な文脈のなかでプロセスがいかにか作動するのかを理解すべきこと、を挙げる。しかし、何を「証拠」としてカウントすべきか自体が哲学的な問題であるときに、文脈から独立した偏りのない基準がなければ、証拠／対抗する証拠／証拠でないものを誤解するリスクが高まる。普遍的な枠組みを参照することは、（前例をそのまま模倣するといった）誤りに対する安全装置のようなものであり、文脈以外に頼るものがなければ、何が良い／悪い一般化なのかを評価することはできない。

### 解釈 2：連帯としてのフロネシス (pp.37-39)

- Spicker は Flyvbjerg だけでなく、Dunne (1993)<sup>4</sup>も参照しながら議論している。しかし、Dunne によれば、彼の Aristotle 的なフロネシスの解釈は Flyvbjerg の解釈と大きく異なっている。Spicker は、この両者の違いを認め議論することを怠っている。
- この点についての異論を脇に置くとしても、Spicker が迂回した哲学的な議論はほかにも見出すことはできる。たとえば、Dunne は Habermas を批判するなかで、科学的な知 (episteme) と道徳的な経験・判断 (phronesis) を切り離す Aristotle に追随しているが、Dunne の議論には、現代科学が Aristotle の哲学に与えた影響を無視しているという問題がある。
- また、アリストテレス主義者は、普遍性に訴えかける倫理 (an ethic which speaks to universals) を拒否するが、そこでは文脈が実践的判断のための十分な根拠を提供すると想定されている。しかし、フロネシスを抵抗と結びつける解釈と同様に、文脈に頼るだけでは、その文脈を規範的に評価したりするための確実な根拠を得ることができない。
- 両者の違いを認めずに Flyvbjerg と Dunne を並べることで、Spicker は、非常に広範にわたる哲学的論点にわれわれの注意を向けることに失敗している。もしそれが意味のあるものであるとするならば、フロネティックな社会科学と社会政策は、Spicker 以上に、この種の哲学的議論に注意を向けなければならない。

### 結論 (p.39)

- 実証主義や実在論、因果的説明に反発するなかで、Spicker は社会科学と社会政策へのフロネティックなアプローチを選択するが、そうすることで、本論文で見たような同様に問題を抱えた別の苦境に足を突っ込んでいるだけなのかもしれない。

<sup>4</sup> J. Dunne, 1993, *Back to the Rough Ground*, Notre Dame: University of Notre Dame Press.